松村禎三先生との出会いを振り返り

私が大学院に入った時に指導教員が松村先生となって、それが直接の出会いの始まりでした。既にその前に、先生の「前奏曲」を現音の作品展で若杉弘指揮読売日響で聴き衝撃を受けていたので、その存在感は大いに感じていました。4 年生での私のオーケストラ曲を芸大試演会で演奏される事になり、先生がそれを聴いて下さり、終わった後に君の担当になったのでその曲を持って 4 階にいらっしゃいとあの独特な言い回しで柔らかく少し控えめに言われたのを今でも覚えています。その当時のオープンリールの録音テープをもってレッスン室に行き、先輩達と共にレッスンを受けたのです。

テープを聴いた後か先かにアナリーゼしてもらおうと言われ、E-Dis-A というオーボエの出だしをモティーフに展開したというようなことを申し上げたと思います。それに対し学生として充実した力量は認めるが、先生はそのモティーフでは書かないし一切興味もないと一刀両断に言われ、最後のコントラファゴットの最低音 B の終止音は滑稽だったと決して厳しくなく優しく仰った事で、かえって胸に突き刺さる忘れられない初めてのレッスンとなりました。

その後は、そうした指摘がどうにも気になってなかなかレッスンに足が向かず、そうこうしていると電話がかかって来て、君は僕のクラスだったねと本当に分からなくなって確かめるための連絡があったと思います。

そして作品展で発表するため、それ迄には無く緊張感をもって書き始めていた「木管五重奏曲」の冒頭部分を見て頂こうと、狛江の以前のお宅に伺った事を鮮明に覚えています。緩徐で静寂に持続音が絡まっていく書法で、これはピアノで弾けないから足踏みオルガンで弾くかと仰って先生と連弾で弾くことになりました。そして弾き終わると、即座に君が何を考えているか解ると仰って下さり、面白いと思うと評価して下さいました。それで、前に進める勇気を頂いたと思っています。それが私にとっての、公に発表する処女作となりました。

その後は先生の再三に渡る 5 度の引っ越しに、その当時の最年長の学生として先頭に立って狛江から杉並、杉並から駒込、駒込から高輪、高輪から成城ととにかく先生のお仕事部屋を整える事を優先し、最初の方では 2 トントラックのレンタカーに机や椅子や楽譜、図書類等先生の身の回りのものを積んで運転したのを思い出します。荷台に高橋君が乗っていたかもしれません。そして別に業者が運搬したグランドピアノを設置し、机や椅子を配置してそのまま先生が作曲できる環境を整えたと思います。高輪では先生のオーディオ装置、成城では当時の最先端のソニーのトリニトロンテレビなどを選んで

お世話したこともありましたし、古い一体型のステレオの配線など電気関係を何かとやらせて頂きました。どこまでそれがお役に立ったかはわかりませんが、私を信頼して下さり任せて下さった事で大いに気負い、多少なりともお役に立つのが嬉しくありました。奥様も実力以上に見て下さり、やっぱり我が家に必要な人と仰ったこともありました。

ピアノ協奏曲第１番の改訂で、パート譜の書き換えをお弟子達と共に狛江のお宅に泊まり込みで作業もやらせて頂きました。その中には吉松隆君もいました。例のカデンツの半音階の改訂が、主たるものでした。泊まり込みの際には、奥様の美味しいお手料理をご馳走になり、先生が「くしゃみは、味付けが上手いの。」と仰ったことを覚えています。そしてその改訂版の初演を上野文化会館で演奏の際に、野島稔さんの譜めくりを仰せつかり何とか役目を果たしました。その後に、大学院を修了して現音からのお話で、文化庁の芸術家国内研修員に応募し採択されて、松村先生に引き続き師事することとなりました。その作品をベースにして新たに「管弦楽のためのトリアス」と題して現音の管弦楽作品発表に応募し選ばれ、山田一雄指揮日本フィルハーモニーで吉松隆君の出世作「朱鷺に捧げる哀歌」と共に初演されました。それが私の松村先生との出会いの総決算のようでもありました。初演後に先生と座席の通路で出会い、私の幾分不安げな表情を察してか、「今ひとつだね。演奏は良かったのではない。」と言われたことを良く覚えています。確かにリハーサルが最悪な状態で、胃が痛くなる程でしたので見違えるような演奏ではありました。吉松君程ではありませんが、批評でも評価されたことがその後の私の原点になっています。また吉松君とは高橋君と共に松村先生の紹介で、若手の記録映画の音楽を担当したこともありました。高橋君はその時書いた曲の一部が、その後の彼の作品の出発点になっているのではないでしょうか。

とにかく月並みの言い方ですが、公私に渡って本当にお世話になりました。その「トリアス」初演の前年に、松村先生の同世代で芸大楽理科出身の東海大学創始者の松前重義博士のご次男松前紀男先生から、さるパーティーで東海大で作曲の新任を公募しているとお聞きになり、真っ先に私が合っていると思われ、その後に私にそのお話がありました。そして推薦状は池内先生に書いて頂くのが良いと仰って、四谷のマンションに一緒に行って下さいました。池内先生は高校時代から師事し、西荻窪の以前のお宅に毎週伺っていたので、一も二もなく書いて下さいました。その文面で「正格」という表現があり、その一語に松村先生が感嘆されたのを覚えています。池内先生が「僕のは、いつもこんなものです。」と仰ったのも覚えています。それが功を奏したのか、私が新任講師に選ばれ、それ以来 37 年間東海大にお世話になりました。総合大学で音大ではない実技と学問との融合を図った特色を持ち、私も視野を開かされて今の自分があります。

松村先生は、もっとも血気盛んな青春時代を５年間の闘病生活で失い、肌脱ぎになられた時にハッとさせられる背中の深い傷後に、片肺だけではなく失ったものの深さが刻印されていているようでした。その分の情念の深さは、誰をも及ばない底深さでそれが先生の音楽にすべて表出されていることは、私が改めて申し上げるまでもないでしょう。

池内先生は、松村先生を評してアマチュアリズムの背景に誰をも及ばぬ熱意があるという意味のことを仰っていたと思います。池内先生は誰よりも欧州の伝統を真に受けたお立場から見れば、松村先生は音楽の王道からは逸れていると見ていたように思いますが、それでもそれに余ある熱意の深さは評価し愛情をもって信頼していたと思います。

私も中学の吹奏楽部活から音楽の道を志し、高校から和声とピアノとソルフェージュを始めた晩学で二浪して芸大に入学しましたので、アマチュアリズムが背景に潜んでいます。松村先生は当時、芸大生の視野の狭い頭でっかちな学生を常に批判しておられ、私にはそれがあまり感じられないと先生ご自身に通じるアマチュアリズムを見抜いていて、芸大入学後も中学時代の仲間と吹奏楽グループの活動に加わっていた事を、それは良いねと本気で仰った事にすべてが現れていました。そうした一言一言に表面的な見方には一切無縁な深い洞察があり、それに限らず先生程すべてを見通す勘の鋭い人には後にも先にも出会っていません。

音楽は本来生活と共にあり、日常という地に着いてこそ真に広く説得力を持ちそれが松村先生の根底にいつもあると思います。だからこそ、先生は映画音楽でも作品でも姿勢は何ら変わらず、軸はぶれていないのだと思います。アマチュアリズムとは、松村先生にとって狭い価値観に陥らず日常と幻想とを包括する深い世界観に立っているという最大の賛辞だと思います。

私は池内先生のように欧州に指向し、先生のアジアの背景とは異なると思っていますが、それを懐深く君はヨーロッパだねと容認し、決してアジアを求めませんでした。しかし、時を経てフランスに１年間住んで学んだことで日本人である事を深く考える様になり、意識せずにそれが根底にあり松村先生と変わらぬものがあると自覚する様になっています。

松村先生との出会いは語り尽くせないものがありますが、私の人生の出発点の大半が松村先生との出会いにあることを、今更ながらに思い返します。

東海大奉職後からはあまり先生の下へ足を運ぶ事が無くなり、次第に大学との関わりが抜き差しならぬものになって持て余す程の大きな責任を背負う事で、先生の訃報を聞き狛江のお宅に駆けつけるまでご恩に報いる事無く不義理をしていました。せめてもと盆暮れに奥様が喜んで下さったスープの缶詰をお送りし続け、奥様が亡くなられた時に

は駆けつけられませんでしたが、葉書に裕介君がスープは好物だったと書いてくれたことを思い出します。先生の優しさが裕介君に受け継がれていることをその一言で感じ、先生からのメッセージのようにも思えました。初めて狛江のお宅に伺った時は、裕介君がまだ小学生でしたので時に流れを改めて痛感します。

気がつくと、私も先生の晩年の世代に立ち入ろうとしています。高橋君を筆頭にして、松村先生の息がかかった次世代の頼もしい皆さんが集っていることに感じ入り、APSARAS の活動の発展を心から祈っています。

一般会員となって皆様と意を共にし、松村先生との絆を引き継ぎ保ちたく、私なりの立場で独自な関わりとして何らかのお役に立たせて頂くことに致しました。どうぞ末永く、よろしくお願いいたします。

二宮　洋